よかった、会えて

田辺聖子

よかった、会えて

一九九二年六月十日　初版発行

著者　田辺聖子

発行者　増田義和

発行所　実業之日本社

本社　東京都中央区銀座一―三―九
〇三(三五六二)二〇五一(編集)
TEL　〇三(三五三五)四四四一(販売)
振替東京一―三二六　〒一〇四

支局　大阪市北区曽根崎二―十二―七
梅田第一ビル内
TEL　〇六(三一一二)一五七三

印刷　大日本印刷　製本　共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えします

ISBN4-408-53176-6

© S.Tanabe 1992
Printed in Japan

定価1300円

目次

よかった、会えて　5
火筒（ほづつ）のひびき遠ざかる　39
正しい愛想のつかしかた　75
はじめまして、お父さん　103
田舎の薔薇　133
コテコテのあほ　167
山歌村笛譜（さんがそんてきふ）　201

装画·装帧／灘本唯人

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

よかった、会えて

よかった、会えて

結婚式というのは、花婿、新郎もさりながら、花嫁というのが、式の目玉であると思われる。花嫁はケーキのトッピングである。

目玉の花嫁がいない、というのは、えたいの知れぬ混乱と不安をひきおこす。

途中でいなくなったというのなら話は分るが、出席者がじれじれして待っているのに、花嫁は姿をみせないのだ。結婚式は神式の予定であったが、きめた時刻は過ぎつつある。

仰々しくしないでおこう、ということで、花嫁は家から白いワンピースを着、白い花束を持って式場へやってくるはずだった。

それがいつまでたっても姿を現わさない。

「手筈はきちんとしてたんやろうねえ」

と姉がいった。

「あんた、ええトシやさかい、きちんとしてるやろ思て、任しきりにしといたのに……頼りない。伊達にあたま禿げさしてる場合やあらへんが」

ズケズケ言いの姉は、罵詈も痛烈である。

「どないなってんねん、えっ」

再び姉がいう。もう十ぺん目だ。

「花嫁さんどないしてんっ。えっ！」

こっちが聞きたいくらいだった。佐賀は新郎ではあるが、べつにモーニングではなく、黒い上衣に、銀色のネクタイを締めている。それで、市民会館の結婚式場係は佐賀を身内か友人と思っ

たらしく、
「式の時間がずれこむと困りまんねんけど、そろそろ始めてもらわれしまへんか、何し、市ィの人間やよってに、残業すると組合がなあ」
という。佐賀は返答に詰ってしまう。
「そろそろ始める、いうたかて、花嫁さんおらへんかったら、どないもならへんがな」
と姉は腹立たしげに言い放ち、
「ひえっ。花嫁さんまだでっか、産業道路が今日は渋滞してるんかいなあ、日曜でっけどな」
係り員は交通渋滞のせいと思いこんでいるらしく、渋滞渋滞と呟きながら離れていった。
「交通事故、いうことはおまへんか」
とこれは新婦の麻美側の親族代表という老人が、入れ歯をかくかくと鳴らしながら、
「警察へ電話してみたらどないです？」
と佐賀をせきたてる。これは仲人格である。
「何かあったら、連絡があるはず、渋滞にまきこまれた、いうても電話ぐらいかけられるはずやありませんか」
と佐賀の姉は、新婦（いや、まだ式を挙げていないので、新婦になるはずというべきか）の麻美を非難する口ぶりで、老人にいう。
「時間、間違うた、いうことないやろうねえ。あんた、ちゃんと打ち合せしたんか」
姉は佐賀とは一廻り年上なので、昔から佐賀を小僧っ子扱いするところがあったが、いまも四

十一の佐賀にきめつけるようなもの言いである。
「間違うはずはないが。オレも分らへん」
佐賀は憮然とする。
ごく内輪の式、というので、みな平服である。麻美の友人たちもプレーンなワンピースやスーツ姿だったが、手持ちぶさたにひとところに集まって、雑談に夢中だった。
「ちょっと。子供ほしがるよって、折詰開けてええかしらん、悪いけど」
妹がいいにきた。この市民会館の結婚式場では、かねて簡素な新生活運動を提唱して、安あがりの結婚式を、ということで、折詰に酒一合瓶で披露宴となるのである。それはそれで、市民に重宝がられ、昔はずいぶん利用者もあったが、ここ五、六年前ごろから、急速にさびれてしまった。こんなに小さな郊外の町でも贅沢志向になって、大阪・神戸のホテルや、結婚企業の新しいたてものを、市民は利用するようになったのである。かくて市民会館の結婚式場では、入っている業者もやっていけなくなり、この月中に閉じられるらしい。麻美が「安あがりでおもろいやん」というので申し込んだが、どうやら佐賀の結婚式がラストの店仕舞らしかった。
「そんな縁起のわるいトコ利用するさかいや。なんぼ安あがりや、いうても」
と姉はいっそう腹立たしげにいう。
「けど遅いなあ、どないなってんねん。あンた、心当りないのかいな、式に花嫁が遅れる、いうたかて、三十分もいうのはひどいわ。まさか、すっぽかす、いうことはないやろね。逃げたんとちがうか」姉の言葉は一層過激になる。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

この近くに小さい神社があり、神職はそこから出張してくる。用意ができたら呼びに来とくなはれ、と、神職もお巫女さんも帰ってしまった。

「すっぽかす、なんてそんな奴、違う」

というが佐賀は不安である。ひょっとすると、佐賀にも把握しきれない部分があるかもしれない。

友人の大館が（共同経営者だ）出席してくれているが、こうしてじっと待っている時間も勿体ないという〝貧乏ひまなし〟の仕事だから、廊下で電話をかけまくっていた。

身内か誰か続き柄のわからぬもう一人の老人が、ロビーの椅子に坐ったまま、折詰を開き、一合瓶の酒を飲みはじめた。

十四、五人の集まりだが、にわかに雑談の声がたかくなる。麻美の友人の娘たちだ。

——えっ。先に披露宴、はじまるの。

——おなかすいた人は、折詰を食べて下さいって。

——麻美、急病だって？

——交通事故だって聞いたけど。

——どこで？

——産業道路で。

——えーっ、病院へ運ばれたの？

——花嫁衣裳のまま？

――うッそー。麻美は時間まちがえたのよ、もうちょっとしたら、遅刻、遅刻、なんて走ってくるわよ。そそっかしいんだから。
――缶ビール、外の自動販売で買ってくる。要る？
――うん、待ってるあいだ飲んでていいですか？
これは佐賀にいったのである。大館が気を利かせて買ってきてくれた。そうして一つを佐賀に手渡し、小声で、
「あと二、三十分待ってみて、来えへんようやったら、適当に言い繕うてひとまず、おひらきにしたほうがええのん違うか」
この男のあたまは、いつも仕事でいっぱいなので、結婚式に花嫁が姿を見せないという非常事態に、毫も心を動かされたようになかった。
「えらい取り込み中に悪いけど、十三紙器なあ、機械の具合、佐賀はんに見にきてほしい、いうとったで。ホカの人間ではあかんのやて。それに児玉食品からも電話あった」
などという。
十三紙器なあ、と佐賀はうなずきながら、半分がた、うわの空だった。
ねずみ色の上っぱりを着て、黒い腕カバーをはめた、ここの清掃係のおばはんが、
「珍しこともおまへんデ。こういうの」
などと、固まった客たちにしゃべっている。
「式をすっぽかす花嫁さん、――花婿さんもときどき、いやはりまんな。――お二人でケンカし

て、雲がくれしはったり逃げたり。たまに仲直りしはる組もあります。仲直りはお若い人らの組でんなあ」

と、佐賀のうすくなったあたまを眺めながら、このカップルは難しかろうという口吻だった。

「そんなじゃらじゃらしたことあるかいな」

佐賀の姉は、いってゆくところがないので佐賀にどなった。

「着物の借賃に加えて、足袋から襦袢まで新しいのん買うたんや、それに腹巻まで新調してきたのにっ。たよりない子ォやな」

佐賀の姉だけ、黒い裾模様を着ていた。

麻美も両親を亡くし、一族は九州にいるので、身内といっては仲人格の老夫婦だけである。佐賀は何べん聞いても、麻美との続き柄をおぼえられない。仕方なく「おじさん」と呼んでいるのだが、

「おじさん。——もし麻美が来えへんかったら、とりあえず一応、みなさんにお引き取り願わな、しょうまへんな」

老人は補聴器の具合をたしかめてから佐賀の話を聞き、うなずいた。そして昔話をする。

「今日びでも、こんな手違いが、あるんやろか。——昔はなあ、昔はおました、これから婚礼、いうときに赤紙（召集令状）来てなあ、山奥やから、連隊へ入るのには、すぐ発たにゃ間に合わん、盃事をすますなり、婿どんはすぐ席たって、花嫁一人坐らして『高砂や』になって……。今はそんなこともうないはず、思たら、やっぱりおますのやな。——あんた、何やったら、一人

坐って式してもろたら、どないです、そのうちには来るかもしれまへん、嫁はんも」
なんで一人で坐って結婚式せんならんねん。
佐賀はいまいましい。
これは姉にも誰にもいえないが、そういえば何となく、妙な予感があった。結婚式の二日前、ということは一昨夜だ。
深夜に麻美から電話があった。
「こら、おっさん」
「何や、酔うとんのか」
と佐賀はいった。
麻美が佐賀のことを「おっさん」と呼ぶのは喧嘩をふっかけるときか、とびきり上機嫌なときだ。前の場合はたいてい酔ったときだ。
〈おっさん〉と二十八の麻美に呼ばれても仕方がない。佐賀はあたまの前半分うすくなった上に白髪がふえはじめている。両方からはさみうちだからたすからない。しかし自分では気持は三十代のままでいるつもりだ。あたまはともかく、顔は皮膚の色つやもよく、年よりは若々しいハズであるが、麻美からみれば〈おっさん〉には違いなかろう。
そのくせ、〈おっさん〉の佐賀と結婚したいとせがんだのは、麻美であったのだ。
(ぼく、資産あらへんで)
と佐賀はいった。

（一流企業でもなし）

佐賀は友人の大館と共に、小さな機械設計会社をやっている。七、八人のスタッフやいくつかの下請をなんとか食わせている、という程度である。儲けは薄いが忙しいことはとてつもなく忙しい。（なんでこない、儲かれへんねん、やりかた悪いんやろか）と大館と言い合い、（まあしかし、舞いが舞うだけ、マシとせんかい）などと慰め合っている。大館は妻子に老母を抱え、スタッフも若いくせにみな妻子持ちだ。

みんなで会社を守り立てていかなければ、どうしようもない。

尤も佐賀だけは独り身で、両親も亡くなっている。年の離れた姉と、すぐ下の妹は早くにどちらも結婚しており、佐賀は身一つのしのぎをつければいいという気楽な状況である。気楽すぎて、つい今まで独身で過ぎてしまった。仲ヨクした女たちもいないではないが、今日びの男と女、働いていれば忙しいばかりで、よくせき、どちらかが、

（これだけは切りたくない）

という気で必死に絆を結んでいなければ、するするとほどけてしまう。佐賀のほうも、これは手放したくない、というつながりも今までなかった。ほどけるままの人間関係だった。

ただ一つ、事務機器の会社の女性営業員だった木村美晴とは、一緒にいて気持いい関係なので、いっとき週に半分ぐらい毎日逢ったり、佐賀のマンションに彼女が来て泊ったりしていたが、美晴は結婚しない主義、つまり、非婚論者だそうである。

（あたし、両親抱えてるし、一人娘だし……それから、これはつまらない理由だけれども、あな

たより年上だし）

といっている。美晴は四十三になる。ウエストにちょっと肉がついておなか廻りがたっぷりしているが、佐賀はそこも好もしい。平板な目鼻立ちだが、眼に光があり、コトバは明晰に適確になだれおちてくる。おしゃべりが快い。表情もいい。

ユーモアがあって、気持があたたかい。

要するに佐賀にとって美晴は、女ではあるが、

〈オトコ同士としてつきあえる女〉

というところが気に入っている。（シュールやな）と思うが、まさしく美晴はそうなんである。スタイルからいえば、おばさんぽいが、体全体にいうにいえない女の色気というか、知性も添うていて、佐賀は好きなのだ。佐賀はガチガチに痩せた女、かしこそうなのを鼻にかけているような女、別嬪らしくみえる女、というのは好かない。

美晴なら一緒に住んでもいい、と思うのだが、美晴が非婚主義者というのではしょうがない。結婚という形式は主義として取らない、というなら、同棲でもいいと佐賀は思うが、それも両親の生きている間はダメだ、という。

（えらい旧式やな）

と佐賀はいったことがあるが、

（あたし、旧式とか古風とかいうの、好きなんよね）

といわれてしまった。非婚、というのだけ新しくて、あとは旧式好き、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com